

St. Luke's International University Repository

地域保健活動と病院の役割:聖路加国際病院公衆衛生 看護活動を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅原, 虎彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/95

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



地域保健活動と病院の役割

—「聖路加国際病院公衆衛生看護活動を中心に」—

聖路加国際病院院長 菅原虎彦

地域保健に関する病院の役割は地域住民の出生から死亡までの所謂包括医療奉仕にあるといえよう。具体的には(1)病気の適切な診療によって早く健康を回復して日常生活に復帰させる診療活動(救急、休日医療も含む)(2)自覚しない病気の早期発見によって大事に至るのを未然に防ぐ予防医学活動、(3)公衆保健衛生看護活動などがある。(3)の中には、1.病気の伝染や発病又は悪化を防ぐ保健衛生業務とその指導教育活動、2.在宅患者の看護指導と教育に当る訪問看護活動、3.集団の健康管理などが含まれる。

(1)病院の診療活動は医学の進歩に伴って絶えざる前進を続けてきたが、近年臓器別診療への分化が進むにつれ、病人を臓器診療の対象として取扱い、病人として治療する態度が崩れてきた。自分が病気になった時どのような取扱いを望むかを医療人は常に心せねばならない。これが医療機関内部の最大の問題点であろう。次に病院の重装備化、医療看護の改善が進むにつれ、病院存続の経済基盤が危うくなって、地域医療ないし広域医療の立場から医療行政の大きな変革がやがて到来するであろう。この問題については別に十分な討議研究を経て試案を練らねばならない。

(2)予防医学活動は簡単な健康診断の始まりからみれば数十年の歴史をもつが、医学設備を用いる近代的予防医学はおよそ20年ほどの間に1週間人間ドックから2～3日の短期ドックを経て、この数年の間に自動化・健診装置の導入による所謂半日ドックまで進歩の跡が著しく、都市優先的に普及しつつある。発見された異常を早期に治療する総合病院の働きを背景にもつ有機的なサービスが今後の普及にかなりの影響があると思われる。また、地域によっては健診装備を具えた移動健診車を用いて地域内の巡廻健診を行っている所もある。いずれの場合もわが国では胃癌胃潰瘍が多いため、胃X線検査を欠かせないという日本の健診方式ができた。

(3)公衆保健衛生看護活動(public health nursing service)は早くから地域保健活動の有力な担い手としての評価を得てきた。それは医療活動とは別に自然発生的ないし宗教的な隣人愛あるいは思想的背景による

健康保持救済運動として生れた一面もあるが、一面では医療活動の一環として副次的に生れ、あるいは保健政策のもとに医療人の指導協力を以て始まり発展したとも言えよう。始めは看護婦後には保健婦が活動の中心となり、医療活動の側面的援護をかねながら、積極的に保健指導教育を展開することになった。西は大阪、東は東京で大正後期にはほぼ時を同じくして始まったが、大阪では朝日新聞社のうしろ盾を以て民間奉仕事業として重点目標性の活動をした、一方東京では聖路加病院を中心として政府や東京市との相互理解と友好関係をもって弾力的な活動を進めた。後に聖路加出身の保健婦、看護婦が全国に散って、各地の活動に広く影響を与えることになる。そこで聖路加で生れ育った公衆衛生看護活動の歴史を概観して、病院と地域保健のかかわりに於る今日今後の活動の参考に供したいと思う。

まず第一に特筆すべきことは本院の創始者 Dr. R. B. Teusler の卓越した指導精神を歴代の院長が引きつぎ、この働きの意義と重要性を奉じて常にその活動を守り育ててきたことである。次に、この活動の始まる前に本格的な看護教育の基礎固めの長い期間があり、公衆衛生看護事業を始める準備期間ともなった。

Dr. Teusler は1900年(明治33年)米国聖公会の宣教医師として来日し、1902年(明治35年)東京築地に20床の聖路加病院を創めた。明治37年には2年制の米国式看護教育を始め、大正9年聖路加病院附属高等看護婦学校として、高等女学校卒業を入学資格とする我が国最初の高等看護教育機関となった。昭和2年文部省令による聖路加女子専門学校となり、29年聖路加短期大学、39年聖路加看護大学と昇格し、45年別に聖路加国際病院附属高等看護学院(2ヶ年進学課程)を設けた。この間病院の公衆衛生看護部は学生の教育に実習に不可欠の役割を果してきた。

大正12年、時の東京市長後藤新平が乳児死亡率の高いことを憂いてトイスラー院長に相談し、東京市と聖路加病院が協同して深川森川町の貧民窟、浅草玉姫町、聖路加病院の3ヶ所に子供健康相談所を開いた。大震災直後にはミルクステーションを設けて、調乳指導も

行った。

同13年、東京市の委託をうけ聖路加病院内に産院と乳児院が設けられ、現在の築地産院の母体となった。

14年、小児科医エリオット女史、米日赤看護婦ミス・ヌノが来日し、本院の公衆衛生看護活動の組織化を計ることになる。この年文部省北豊吉衛生課長と協議して本院に文部省学校診療所をおき京橋区内の12の尋常小学校を対象として毎日午後の診療で月間942～2866名に及んだ。また3名の学校看護婦を派遣するなど学校保健の端緒となった。

15年には、乳幼児健康相談(Well baby clinic)を始め、家庭訪問による指導教育を開始した。

昭和2年、日赤から4名の看護婦を迎え、米国から帰朝した平野みどりが参加して正式に公衆衛生看護部を創設した。

翌3年には、部員9名となり、結核相談、離乳食・病人食の調理学級や乳児の着物作り指導、性病予防に父親学級も計画された。

昭和5年には、医療社会事業が始められ、患者の経済的援助、社会家庭環境の調整、療養所紹介などの面で協力することになった。

昭和6～7年には、約70名の部員を持ち15の小学校に保健婦を派遣し、昭和8年には、工場看護婦も派遣している。また神奈川県と合同で逗子、葉山、三崎、西浦村の3町1村を湘南特別衛生地区として、公衆衛生看護事業のモデル地区活動を展開した。関係当局、地区指導者、医師との協議と実地視察により各地区の重点目標を決めて、7名の保健婦が分担配置についた。逗子では消化器伝染病、トラコーマを中心に伝染病予防指導、葉山では、学童保健指導に重点をおき全戸衛生教育、月1回乳幼児健康相談、西浦では栄養指導を中心に妊娠・母親の衛生教育、戸別訪問、三崎では結核、乳幼児死亡問題を中心に予防衛生教育などにめざましい成果をあげ、新聞雑誌にも報導され、農漁村保健婦事業の先達となった。

昭和10年、東京市京橋区特別衛生地区保健館が聖路加国際病院の一部を借りて発足し、医師を含め保健婦23名が移って病院の公衆衛生業務がそのまま引き継がれた。学校衛生部、保健指導部、予防部、防疫部、社会衛生部、保険指導部、庶務部の7部門構成である。12年保健所法の制定に伴ない第一号の保健所に指定され全国保健所のモデルとなり、13年に設定された公衆衛生院の臨地訓練所としての使命も担った。農村保健所のモデルとなる所沢保健館もこの年に発足した。

大正12年ロックフェラー財団からトイスラー院長を通して公衆衛生事業の援助を日本政府に申し込めたが、昭和5年以降に政府の受入れ態勢を整えてこれらの施設ができたのである。

さて、東京市保健館に多数の職員と業務が移ると共にその他の保健婦も地方の要請に応じて分散し、残り4名となった。それでも、保健館の利用を好まない中流以上の階層者が有料特別希望者として病院の公衆衛生看護部を訪ねた。戦時気運が募る時勢でもあり、中堅国民層の人口増加、保健強化も重要な課題であったので、乳幼児死亡率の低減、結核予防、家庭の生活改善を柱にして国民の体力増進に寄与することを任務とした。

昭和16年12月大東亜戦に突入し、それ以前に米国人職員はすべて引き揚げ病院は完全に自立体制をとることになったが、戦時統制下の耐乏生活の中で家庭訪問を続ける一方、工場の健康管理、戦時托児所、救急活動などに挺身した。

昭和20年終戦に伴ない9月18日病院も学校も連合軍病院として接收され、近くの空家になっていた都立整形外科病院を借りて11月1日、24床の小型総合病院として再発足した。虫垂炎、ヘルニアなどの手術患者を家庭に運び保健婦の訪問看護指導教育をやって喜ばれた。また米軍PXや事業所の健康管理、学校保健、水害救護活動、病院職員の健康管理組織化などに活躍した。

昭和28年2月、接收病院施設の一部返還以後は手術直後帰宅患者の訪問看護はなくなったが、医師の指示による訪問看護は続いた。29年、世情、病院事情の好転に伴ない公衆衛生看護業務も再検討され、妊婦相談、主婦の健康相談が再開され、人間ドックも始められた。

昭和31年、病院の接收全面解除となり病院の診療体制が一段と整備され、36年外来棟と外科病床増設が完了し、38年旧卒業生の非常勤保健婦を加えて公衆衛生看護部の強化を図り、健康相談実施要綱、保健指導用リーフレットや教材を保健婦が作り、検討改善を重ねて今日に至る。しかし社会状況の変化、病床の増加、医学の進歩により家庭の重症患者が減り、結核も減少しその訪問指導は保健所扱いとなり、脳卒中・心臓病・癌の死亡率が増すなどの世の中の疾病構造が変るにつれ、訪問看護指導も慢性疾患の家庭療養に関するものが多くなってきた。新生児訪問指導は都内6保健所管内の本院出産者の希望に応じている。乳幼児健康相談(Well baby clinic)は33年以降隆盛に進み健保連と病院協会の協定もできた。主婦の健康相談(Well mother clinic)は35年健保連と病院協会の契約ができ、妊娠ドックが誕生して、37年以降全国に普及することになった。これと併行して29年行ってきた母親教育の希望者が増し、32年から母親学級(Mother school)として集団教育に移り、妊娠7ヶ月までの前期と7ヶ月以後の後期に分け、助産婦・医師の協力を得て、好評裡に行われている。

33年、腎臓病、リウマチ熱など一部慢性疾患クリニックを受け持つことになって患者の指導教育に成績をあげるとともに、一般外来の混雑を緩和する利点もある。現在糖尿病クリニックを受け入れつつあるが、やがてその他の慢性疾患指導にも取り組むことを考えている。

病院職員の健康管理も職種により特別な検査項目を加えて管理内容を更に充実しつつある。

以上、聖路加国際病院の地域保健との関わりについて、主として公衆衛生看護活動の歩みを略述した。発足当初から母子保健の中心目標はゆるぎなく存続しているが、社会状況の変化や医学の変遷に関連して地域

社会の疾病構造も変るにつれて、公衆衛生看護活動の対象目標も柔軟な移行を示してきた。病院医療と相携えて活動できる強みと目標選定の融通性、自主的活動などが病院の公衆衛生看護活動を活気づけるものであろう。今後の問題として保健所との関連性を探究することによって、一層効果的な地域保健活動を展開できる可能性を期待している。取残された老人保健の問題なども含まれるであろう。

本稿の一部は第2回日本病院会学会（昭和51.5.22）シンポジウムに於て発表した。

Hospital Role in District Health Care Activities — Review of Public Health Nursing Activities of St. Luke's

Torahiko Sugawara

Hospital role in district health care activities may be involved in comprehensive medical service for the whole life of the district people, including clinical care, preventive medicine and public health nursing.

Presented here is a review focused on public health nursing service of our hospital. The activities were initiated in 1922 with children's health consultant business because of high mortality of infants and milk stations for poor nutrition after the great earthquake, resulting in a leading maternity hospital in 1923. School clinic was first demonstrated in Japan in 1924 and well baby clinic in 1925. Public health nurse (P.H.N.) department was officially nominated in 1925.

The service was extended to home visit for T. B. patients, class of baby-and-patient food and infant clothes and prophylactic education of venereal disease. In 1930 newly-started medical social service joined P. H. N. activities with good help. P. H. N. group also worked up model services in rural districts in 1933-4 with good reputation. The initial public health center of Tokyo started with some physicians and 23 P. H. N. who moved in from our hospital, planting their works in 1935. The remained St. Luke's P. H. N. service was welcomed by middle and high class people.

During the world war II they worked very hard for home visits, health management of factories, kindergartens, emergency care for the wounded, etc.

After the war home visits for postoperative patients greatly increased in number because of shortness of beds resulting from the occupation of our hospital for the allied forces' army hospital.

After the hospital was released from 11-year occupation P. H. N. service has functioned with well baby clinic, well mother clinic, mother school, maternity school, chronic disease clinic, health management of hospital staff and home visits. Services for chronic patients are gaining weight.

In the stream of changes of social situation and medical needs for varied disease structures and patterns P. H. N. services have been adapted to function well for the purposes intended. P. H. N. services may get more energy with elastic selection of service targets and voluntary actions in good hospital activities.

Hereafter a closer communication with other public health centers may promote possible further development of district health care activities.